スキマ妖怪と犬山まな

島田愛里寿

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

スキマ妖怪。

それは神隠しの犯人と言われ妖怪が全体的に力を失いつつある現代社会にて今なお全盛期の力を保持し成長できる素質を持っている妖怪であるがその種族は一体のみと言われている。

彼女の名は八雲紫。

これはそんなスキマ妖怪に転生して数千年たった元人間が犬山まなと交流していく傍ら策謀を巡らせていくお話である。

不定期更新です。

目次

プロローグ ―― 1
転生 ―― 5
第一話 ―― 9

プロローグ

妖怪。

それは説明のできない怪しい生き物・怪現象の総称である。

しかし現代ではそのほとんどが科学で説明づけられて、妖怪の存在を信じない者がふえてきている。

しかし、そんな時代においてもいまだに解決できない事象はいくつも存在する。

代表的なのが『神隠し』だ。

この物語はそんな神隠しをつかさどる、とある大妖怪に転生したとある人間の物語である。

「ふんふ～ん♪」

彼女の名前は犬山まな。東京都・調布市に住んでいる中学一年生だ。

彼女は人一倍正義感が強く好奇心も旺盛で、妖怪に大変興味を持っている。

そんな彼女は今日も鬼太郎たちとすごして、異界・ゲゲゲの森から家路についていた。

「今日も楽しかったな～♪って、ん？」

そんな彼女の前にある女性がいた。

彼女は八卦の萃と太極図を描いた中華風の服を着てリボンの巻かれたＺＵＮ帽をかぶっていた。

「あ、あの～？どうしたんですか??」

まなは彼女が道に迷っていると思い話しかけた。

「あら？ええ。駅近くの商店街に行きたいのだけど…」

「あ、だったら案内しますよ！」

「あらあら。ありがとうね？」

そう言ってまなは女性を案内していった。

（あらあら…私の術を見破って大人の女性として接する人間なんて久々に見たわねぇ…。ということはこの子は妖怪と深くかかわっているということ…面白い子ねぇ…）

と、その女性が考えているとも知らずに…

商店街

「ここですよ！」

「ありがとうね？あ、そうだ。はい、お礼にこれを」

「え？お札??」

彼女がまなにお礼と言って渡したのは『八雲』と書かれた赤いお札だった。

「そのお札を持っていたら厄から守ってもらえますわ。それじゃあ」

「あ、はい…」

（不思議な人だったなぁ…）

彼女はそう思いつつ、そのお札をお守りとして持ち歩くようになったが…

彼女は知らなかった。彼女以外からはその女性は女子大生くらいに見えており、付近の本屋の常連であることを…。

そして彼女は人ならざる者であるということを…。

『神隠し』

それは突然人が消えることを差し、日本を含め似たような事案は世界各地で発生している。大半が山で消えたりしているので、遭難したのだろうと現代では一笑されるが、どうしても説明できない案件も多い。例えば１９３９年１２月１０日に３０００人の中国兵が忽然と姿を消した事件もあり、兵士達の行方は今もって明らかではない。（ちなみにこの事件自体が事実か疑われてはいるが・・・）

そんな神隠しの実行者であると言われ現代でも恐れられている妖怪こそ『八雲紫』。スキマ妖怪と言われ、境界を操る妖怪であり今なお全盛期の力を有する数少ない妖怪である。

それはそんな八雲紫として転生したある人物が鬼太郎の世界で生きていき、まなたちと交流していくお話である。

転生

ここはのちに日本と呼ばれることになる島国の山中。
この地ではある事象が多発していた。
山に入ったものが前触れもなく姿を消して、突然帰ってくることもあれば帰ってこないというモノだ。

これにはどんな説明もつかず、現地の人々は『神隠し』として恐れた。

（転生って、まさか私が経験するなんてねぇ・・・）
その張本人が彼女だ。

彼女の意識が明確になったのは、この事態になる数か月前である。

元々彼女は男性であった。

何を言っているのかわからないだろうが、現代日本に生きるごく普通な男子大学生であったのだ。

そんな彼が何故妖怪に転生したかと言うと、簡単な理由でテロに巻き込まれ、その時に死んでしまい、その際に同じく死んでしまった者たちの恨み・怨念が奇跡的に作用して、彼の魂は妖怪として数百年前にスキマ妖怪として生まれ変わったのだ。

「ふぁぁぁ…」

「あら？相変わらず暇そうね、フフフ・・・」

「あなたに言われたくないわよ…。こんなところにいたら穢れが移るわよ？」

そんな山にある紫の仮住まいに顔を出してきたのは八意永琳だった。

「あなたに言っておかなきゃいけないことがあってね。しばらくしたら私たちは月に移住することになったわ。穢れが予想以上に増えてきていてね」

彼女と紫の関係はこうである。

転生してしばらく混乱していた紫（といってもこのころの姿はマエリベリー・ハーンそのものだが）があまりの空腹と妖怪としての本能から神隠し（といっても隙間に落とすか引きずり込むかして捕食して恐れ・恐怖を得ていたのだが…）をしていた際にこの

ころはいまだ地上に住んでいた月の民を捕食しており、その捜索にきた八意永琳と鉢合わせして戦闘をして以降の腐れ縁なのである。

「あらそう。まぁ気を付けてね？‥‥そう言えばあのきわどい軍服の規定直してなかったの？」

「‥‥上の方針で変えられなくてね」

そう。実はこのころの月の民の兵士や高官に支給される制服はきわどい物が多く、紫も最初はドン引きしていた。これが基準であったが好き好んで着ているのは新兵だけのようで、八意も本意で着ているわけではなかったようだ。

（対魔忍を考えてください）

しかもまだ新米だったころの綿月姉妹もそれを着ているので紫としては戦い辛いことこの上なかった（対魔忍のアサギの服の色違い）。

ちなみにそれを「あなた達痴女なの？」と真顔で指摘したら姉妹は崩れ落ち、八意も苦笑いしていた（姉妹も内心恥ずかしいと考えていたようで初接触の後は私服で来るようになった）。

「そう？気を付けなさいよ」
「それをあなたに言いに来たのだけどね。あなたはこれからどうするの？」
「妖怪として過ごすだけよ」
そうしてこの数週間後、月の民は月にわたっていった。

第一話

さてそんなこんなありつつ現代。

ここはとある空間に作られた八雲家の屋敷。

「紫様。どうかされましたか？」

「あら藍。ええ、少し昔のことを思い出していたのよ」

転生したばかりのころのことを思い出していた紫に声をかけてきたのは、紫の式神の一人にして式神衆の筆頭格である八雲藍である。

彼女は地獄に封印されている玉藻の前の実の妹にして異世界の日本を沈めかけた白面の者その者である。

なぜ玉藻の前の妹である彼女が白面の者であり、紫の式神になった経緯はこれから語られるだろう。

「そうでしたか。そう言えば先日街に出かけて行ってからやけにご機嫌のようですが、なにかあったのですか？」

「ええ。久々に私の妖術を見破った人の子がいたのよ」

「はぁ!?」

この紫のセリフを聞いて藍は驚愕した。紫の妖術はかつて藍が直々に鍛錬をし、さらに紫の独自理論によって大妖怪でも見破れるのはごくごく少数のみというほどのレベルである。

そんな紫の妖術をたかが人の子供が見破ったなどと冗談でも信じられなかった。

「そ、それはまことですか!?」

「ええ、それに彼女からはかすかだけど妖力も感じたわ。おそらく妖怪と知り合いか親しい関係なのでしょうね」

「このご時世に未だにそのような人材がいたとは…」

「面白いでしょう？」

紫の肯定する返答に唖然とする藍に紫は新しいおもちゃを見つけた子供のような屈託のない笑みを浮かべて言ってのけていた。

・調布市　ゲゲゲの森　鬼太郎の家

「これが？」

「ええ、まなが道案内したその謎の女性にもらったお札のうちの三枚だそうよ」

ゲゲゲの森の中にある鬼太郎の家では鬼太郎・目玉おやじ・猫娘・砂かけ婆・子泣き

爺がつい先日まなが紫からもらった『八雲』と書かれていたお札のうちの三枚を見ていた。

あの後まなはそのお札がなんとなく気に入って、紫の忠告通り肌身離さず持っていたのだが、猫娘がまなと偶々街中で会った際にその膨大な妖力に驚いて、まなを問い詰めて事情を把握。

その後、ごねるまなを説得して三枚だけもらってきたというわけだ。

「ふ～む…。どこかで見たような気がするんじゃがなぁ・・・」

目玉おやじはどこかで見た記憶があるようだが、誰が作成したお札か思い出せないようだ。

そんな感じでゲゲゲの森の面々が悩んでいたが、一方のまなはお札を持っていると野良妖怪に襲われることが減ったのでいい物もらえたと喜んでいたという。

実はこの『八雲』と書かれたお札、紫が信用を置いた人物か面白いと思った人物にしか渡さないお札で、妖怪らへの警告も意図されていたのだが、近年そのことを理解できている妖怪は少ないので、お守りのような機能を紫がつけていたのだ。